

# コンゴ東部の伝達用太鼓

太鼓(標本番号H 151403、高さ/66.4cm 幅/103.4cm 奥行/37.1cm)

## 梶 茂樹 (かじ しげき)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

アフリカのコンゴ(旧ザイール)でわたしが見、そして叩いたことのある伝達用太鼓は二種類である。ひとつは、国の北西部森林地帯に住むモンゴ族のもので、一本の木を一メートル弱に切り、中をくりぬいたものである。もうひとつは、東部の森林地帯に住むレガ族のもので、これも一本の木をくりぬいたものであるが、形状は、寸胴型をしたモンゴ族のものとは大きく異なり、女性のハンドバッグを大きくしたような形をしている。いずれも、動物の皮は張らず、バチを用いて叩く。

写真にあるものは、この後者のものであるが、同じタイプのもをコンゴ東部のいくつかの民族が用いており、これがレガ族のものか、あるいはソングーラ族のものか、はたまた近隣のものは正確にはわからない。



い。しかし原理はまったく同じである。

伝達の原理というものは、その言語の子音と母音を省略して、音の高さのみをこれで

なぞるのである。これは日本語にたとえてみると、たとえば標準語で三音節からなるアタマ「頭」という語は、アクセントパターンが低高高であるから、これを伝達するためには、低高高と叩くのである。

叩く際は、上部のスリットが自分と直角の位置になるように構え、片手にもったバチでハンドバッグの横腹の部分を叩く(バチの先にはゴムが付いていて、そのゴムの部分が太鼓に当たる)。上の方を叩くと板が薄いので高い音が出るし、下の方を叩くと板が厚いので低い音が出るようになっていく。

レガ族の村で、「お客がきたから皆集まれ」という文を習い、何回も練習で叩いていたら五、六キロメートル先からオジさんたちが集まってきた。「いや、練習なんです」と言ったら、「用もないのに叩くな」と、叱られた。